

〈中学生の部 優秀賞〉

「自分」を曲げず、「自分」らしく生きよう

精華中学校 二年 寺井 琴音

「人権」とは「誰もが生まれながらにして持っている。人間らしく、自分らしく生きることのできる権利の事」らしい。聞いたことがある言葉。それくらいにしか自分の知識はなかった。

自分は今、「自分らしく生きる」ことができていると思う。自分は過去に何度かクラス替えを経験している。その中のひとつに、少し嫌な思い出があるクラスがあった。その当時は、学校の事を思い出すだけで涙が溢れた。どうして涙がでるのか、自分自身も分からなかった。今思うと、一人でいることに寂しさを感じていたのかもしれない。教室に入るとを怖く思っていたのかもしれない。ただ、胸が痛くて、呼吸がしづらかった。

母に、「学校に行きたくない」と話すと、休ませてくれた。上手に理由を話せない自分に、深く理由を聞くこともなく、

何日も休ませてくれた。そんな対応が、とても嬉しかった。今でも思い出すと、嬉しさと涙が止まらない。母に当時のことを聞くと、「今にもあなたの心が壊れそうな気がしたから、そんな雰囲気だったのよ。だから、ゆっくり休ませることが最善だと思ったの」と言われた。「このまま学校に行けないかもしれない」と不安もあったけど、無理をさせてあなたが壊れてしまうのが怖かったの」とも言っていた。親はすごいと思った。

何日休んでも、クラスメイトはいつも通りだった。体調不良か何かだと思っていたのだと思う。心配してくれる子も、声をかけてくれる子もいない。それが辛かった。いじめにあっていたわけではない。ただ、自分が人の輪に入ることが苦手だったのだ。別のクラスにいる友達、自分を見かけると声をかけてくれる。友達も学校に来ることが少ない。だからとても貴重な時間だったし、当時の自分には救いだった。家以外で誰かと会話することがなかった自分は、寂しかったのだと思う。

クラスで団結するイベントも苦手だった。さきにもふれたが、自分は人の輪に入ることが苦手である。参加したくない

わけではない。一步引いて参加する方が安心できる。当時のクラスは、全員が同じ方向を向いて、同じ熱量でイベントに参加しないといけない雰囲気だった。自分自身もそれが正しいのだと思っていた。「集団行動」をしなくてはいけないものだと思っていた。だから、最初は頑張って参加していた。しかし、気持ちが追い付かなかった。熱が入るクラスでは、厳しい言葉の掛け合いもあった。気持ちに余裕がなくなり、少し引いて参加していても、強制的に元の輪にねじ込まれ、参加させられることが、恐怖でしかなかった。教室も、学校も。

自分は今のクラスが好きだ。今のクラスメイトに言うのは何だか恥ずかしいが、このままクラス替えなく進級したいと願うほど好きだ。自分の殻に閉じこもってコミュニケーションがとれない時があっても、人の輪に入れなくても、「そういう子」として受け入れてもらえている。「一步引いて参加する」ことにも理解してもらえている。自分自身を受け入れてもらっていると実感することで、日常生活がこんなにも充実するのだと驚いている。新しい友達もできた。本当に毎日が楽しい。過去のクラスが悪い訳ではない。いじめられていたとも思っていない。ただ、自分自身が苦手だっただけだ。し

かし、その経験も今の自分をつくっている。友達がいることの大切さ。親からの深い愛情。自分を認めてくれる人の存在のありがたさ。「当時の経験のおかげ」で、より感謝の気持ちを実感している。

学校にあまり来ることができない友達。学校で見かけた日には、必ず声をかける。帰りの際には、「明日も来てね」と声をかける。友達にも、自分と同じ何かがあるのかもしれない。これからも寄り添っていきたい。当時自分が友達に救われたように、そんな存在になりたいと思う。

もし、周りに人の輪に入らない子がいたら、話を聞いてあげてほしい。無理やり輪の中に入れるのではなく、ゆっくりと、その子のペースに合わせて。十人いたら、十通りの考えや思いがある。意見を押しつけるのではなく、分かち合うことで、みんなが「自分らしく」生きることができると自分は思っている。